



Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）一
Author(s)	山本, 一
Citation	語文. 1985, 45, p. 49-68
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68732">https://hdl.handle.net/11094/68732</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 大阪大学文学部国文学研究室蔵

## 後鳥羽院御集

(翻刻)

### 山本

#### 書誌

列帖表二冊。原装本。縦二一ミリ、横一四七ミリ。上下冊とも白地銀泥菊華唐草文の表紙で、左肩に白地銀泥龜甲文の短冊題簽を貼り「後鳥羽御集上」「後鳥羽御集下」と墨書（原題簽）。内題は上下冊とも目録のあとに「後鳥羽院御家集」とする。本文料紙は鳥の子。上冊は墨付七十七丁、遊紙前一丁、後二丁。下冊は墨付八十三丁、遊紙前後各一丁。一面十行で和歌一首一行書き。上冊表紙右肩、下冊巻末に「西莊文庫」、各冊前遊紙表の右下に「鈴屋之印」の朱色の蔵書印あり。奥書はない。書写年代は近世初期（そのうちでは後半）か。

#### 翻刻の方針

- 一、漢字体は原則として新字体による。
- 一、行間書入れ、集付等については、和歌一首が書き入れられている場合は7ボ活字、他は6ボ活字により翻刻する。
- 一、丁の表裏の終りに」を付し、1才等と丁数を示した。
- 一、歌番号は歌の頭に漢数字で付した。

#### 後鳥羽御集上 (題簽)

正治二年八月御百首 人々多詠之

同第二度御百首月日未勘

建仁元年三月内宮御百首

同外宮御百首

同六月千五百番御歌合百首

建保四年二月御百首

春百首御歌

夏五十首御歌

秋百首御歌

冬五十首御歌 1才

恋百首御歌

雜百首御歌

御百首

一、右二項以外の翻刻者の注記は全て（＊）で包んだ。

## 後鳥羽院御家集

正治二年八月御百首

## 春 二十首

人々多詠之

一 いつしかとかすめる空のけしきにて行末遠し今朝の初春

二 春きても猶大空は風さえてあるす恋しき鶯のこゑ

三 子日するけふ春日野に雪降は松に花ざく心ちこそすれ

四 霜かれし野へのけしきも春くれはみとりに移る雪の下草

五 梅かえはまた春たゞ。雪の中に匂ひはかりは風にしられて

六 昔よりいひしはこれか夕霞かすめる空のおほるなる月

七 なかむれは雲路につゝ霞かな雪けの空のはるの曙

八 うすくこきそのよこてあははしたはむれてかすめる空に飛まかぶ

九 誉 2オ なにとなく物あはれるなる二月の雨そほふれる夕くれの空

十 秋のみとたれおもひけん春かすみ霞るそらのくれかくるはと

一一 さらばに又都の花見にそ行しかの山ちに立もはなれて

一二 花か雪かとへとしら玉いはねふみ夕るる雲に帰る山人

一三 桜さく春の山辺にこのころはそとも見えぬ花の下ふし

一四 春雨に軒のかけろみえわかすくれゆくそらのこと／＼しさに

一五 吹まよふ吉野の奥の春風は匂ひをそふる雪け也けり

一六 春のあした花ちる里をきてみれば風に波よる庭の淡雪

一七 かせは吹としつかに匂へをとめ子か袖ある山にはなのちる比

一八 桜はなぢりのまかひに日はくれていつちも遠し志賀の山越

ちる花を吹くるまゝに此春は風を嬉しきみよしのゝ里  
一七 芳野山木すゑさひしく成ぬとも猶やすらはんはなあたりは」

2ウ

一八 こやの里のあやめにましる杜若花ゆへ人にしられぬるかな

一九 すきかてにゐてのわたりを見渡はいはぬ色なる花の夕はへ

二〇 明ほのを何あはれともおもひけん春暮る日にしの山かけ

二一 夏くれは心さへにやかはるらんはなにうらみしかせもまたれて

花に馴しおけあはおしまるゝ匂ひをとめし名残と思へは

二二 くるがたへ春のかへらはこの比やあつまに花のさかりなるらん

二三 夜もすからやとの木すゑに郭公またしき程の声を待らん

二四 卵の花のかけなかりせはほとゝきす空にやけふのはつ音聞まし

あやめ草枕にゆへは今宵こそ我のみ旅の心ちのみして

二五 つくはねの夏の木陰にやすらへは匂ひし花の名残ともなし

二六 夏の夜の夢路にきなく子規さめても声はなを残りつゝ 3オ

二七 時鳥空かきくもる夏の雨におもはせかほの夜半の一聲

二八 夏の月秋にかはらすすめる夜はかけさへ涼しせみの羽衣

二九 軒ちかくしはしかたらへ時鳥雲よく夜ゐのむら雨の空

五月雨は猶はれやらで郭公はのかに名のる明かたの声

三〇 五月雨にふしみの里は水こえて軒にかはつのこゑきしゆ也

三一 うたゞねの夢路のすゑは夏のあした残るともなきがやり火の跡

三二 むら雲はたゞなるかみの声ながら夕日にまかふさゝかにの糸

三三 夏草の草の葉かくれゆく螢さはへの水に秋もとをらす

三四 何となく過行なつもおしき哉花おちはてゝ花ふらね共

三五 みそきする河瀬に風のすゝしきは今夜をこめて秋や立らん

秋 二十首」<sup>三ウ</sup>

冬 十五首

比イ  
4ウ

三六 いつしかと萩のうは葉に音添で袖にしらるゝ秋の初風

三七 竹の葉を吹うらかへすあき風そ露の玉らる夕くれの空

三八 萩原や曉のへの露しけみわくるたもとにしらぬ花すり

三九 風雅うす雲のたゞよふ空の月影はさやけぎよりも哀也けり

四〇 あさくらや木丸とのにすむ月の光もなる心地こそすれ

四一 まはらなる楓のいた屋に影もりて手にとる計すめる夜の月

四二 大かたの秋のなさけの萩の葉にいかにせよとてかせなひくらん

四三 うす霧にあかしのうらははれやらてさたかにみえす沖の釣舟

四五 くまなしや朝ゆふ霧にはれす共かつらの里のあきの月影

秋の月霧のまかきにすみ馴てかけなつかしき山への里

四五 難波かたさやけき秋の月をみて春のけしきそ忘られにける」

4オ

四六 立花のこしまかさきの月影をながめやわたすうちの橋守

四七 月影を浪路はるかになかむれはあまのとまやは山のはなし

四八 夕暮はさひしき物かよもすから月をながめてうちねなんほと

四九 すまの海のあまのいざり火ほのかにて猶晨明のひかりをそ待

五〇 山おろしにみきりの浪はあらくともなを霧ふかし道の川風

五一 明くれの空もたとらぬはつ雁は春の雲路やわすれるらん

五二 きり／＼すうらむる声も庭の秋のすゑこすかせも秋ふけにけり

五三 むしのねはほの／＼よはる秋のよの月はあさらか露にやとりて

五四 さほ姫のそめしみとりやふかゝらんときはのもりは猶もみちせ  
て

五五 身にしみてものあはれなるためし哉村雲まよふ秋すくるくれ」<sup>本ノ</sup>  
4ウ

行秋をおしむ心しふかれはけふもかへらし冬のたもとに

五六 秋くるゝかねのひゝきはすかはらやふしみの里のふゆのあけほ

の白菊のきのふは露とみし程にむすほゝれたるけさの初霜

五七 立田山紅葉の雨のふるまゝに嵐のをとの松にのみして

神無月しくるゝののみか我宿のならのうはゝに

風かる也

五八 ちりはつるたつたの山の紅葉はを梢にかへす木からしの風

五九 冬くればみ山のあらし音さえてむすほゝれゆく谷川の水

六〇 竹の葉はおはる月夜に影さえてむら／＼残る庭のおも哉

霜枯の難のきくに雪ふれば猶はつ花のこゝちこそすれ

六一 さらにもうすき衣に月さて冬をやこあるをのゝすみやき

六二 雪積る有明の月は月さえて離の竹のうらみとりなる

六三 冬さむひらの高ねの月さえてさゝ浪こほる志賀のから崎

六四 おもふにもあはれなるへきとたち哉かた野の原のゆきくれ

六五 けきみれはイふゆのあした三輪の杉むらうつもれて雪のこすゑやしるし成らん

六六 なかむれは春ならねともかすみけり雪露降る遠きのさと

六七 このころのときはの山はかひもなし枝にも葉にも雪しつもりて

六八 しほかまやさむけかるらん冬のよのふけゐのうらに千とりなく  
六九 ふりつもる雪は朝日にむら消て空にしられぬ軒の雨哉  
七〇 けふまでは雪ふるとしの空なら夕暮かたはうちかすみつゝ  
恋 十首

也

六九 ふりつもる雪は朝日にむら消て空にしられぬ軒の雨哉  
七一 我恋はしのたのもりのしのへとも袖のしつくにあらはれにけり  
七二 月夜にはこぬ人まつといとへともくもるさへこそねられさりけ  
れ

鳥 五首」<sup>6ウ</sup>

七三 おもひ侘ねられぬものをなにと又松ぶくかせのおとろかすら  
ん」<sup>5ウ</sup>

七四 此くれとたのめし人はまことこすはつかの月のさしのほる迄  
七五 白菊に人の心そしられるうつろひにけり霜のをきあへす

七六 いにしへに立かへりける心さへ思ひしらるゝまつよひのそら  
七七 身をつめていとひし人そ哀なるいこまの山の雪をみるにも

七八 さりともとまちし日月も徒にたのめしほどもほとすぎにけり  
七九 住よしのきしにおふなりたつねみんづれなき人は恋忘草  
八〇 待かぬるさ夜のねさめの床にさへ猶うらめしきかせの音哉

驕旅 五首

八一 たれまでもたひのね覚はあはれ也しつかおかみもこゝろ／＼に  
八二 岩田川谷の雲まにむらきえてとゞむる駒のこゑもほのかに」<sup>6オ</sup>

九五 白山の松の木陰にかくろへてやすらにすめるらいの鳥哉

本  
祝 五首

九六 万代の末もはるかにみゆるかな御もすそ川の春の明ほの  
九七 石清水たえぬながれの夏の月社のこけもむかしおほえて  
九八 みかさ山みねの小松にしるきかな千年の秋の末ははるかに  
九九 冬くれはよもの木すゑはさひしきに千世をあらはす住吉の松

一〇〇 千早振日よしの影も長閑にて浪おさまれる四方の海哉

一一一 深山辺のまつの雪まにみ渡せは都は春のかすみなりけり  
霞

八四 なにとなく名こそはおしきなきの葉やかさしていつる明方の空

八五 ひくまつはまた霧ふかくも立にけり明ゆく鐘は難波わたりに

山家 五首

八六 山さとの柴の編戸にかけもりてほのかにかすむ春の夜の月  
八七 霜ふかしこともしらぬ山寺にはるかにひょくれいの音哉

八八 秋の月霧のまかきにすみなれて影はつかしきみ山辺の里

八九 物ことにさひしき宿のすさひ哉まかきになるゝ巖の白雲

九〇 なくさめにけふりはかりはたえねともさひしき物を冬のすみか  
は

- 一〇三 大方はかすみもやらぬ明ほのにはるをむかふる塩かまの浦
- 一〇四 海のうへはかすみにくまる春の月に心はかりはすまの明ほの  
波
- 一〇五 梅かゝはなかむる袖に匂ひきてたえ／＼かすむ春の夜の月
- 鶯カワウ
- 一〇六 かねの音にこそ日の日かすはつきてゝ春あくる空に鶯のこゑ
- 花
- 一〇七 春きぬと誰かはつけし春日山古集きえあへぬ雪に鶯の声
- 一〇八 谷にのこることその雪け古集あり出て声よりかすむ春の鶯
- 一〇九 梅かえの梢をこむる霞よりこぼれてにほふ鶯の声
- 一一〇 鶯のはづねをもらせ春やとき花やをそきとおもひためん
- 花
- 一一一 さきにけりかせのこぬまにけふ桜心のほとそたりつゝみん
- 一一二 いかにして春さく花をしはしたに風にちらさてみよしのゝ山
- 一一三 桜さくひらの高ねのはるかせは木のしたのみの雪け也けり
- 一一四 花にくもる月みよとてや御芳野の梢をはらふ春の山かせ」
- 8オ
- 一一五 いそまつたひきえすなかるゝ雪なれや花散かゝる春の山水
- 郭公
- 新千
- 一一六 時鳥しのひもあへすもらす也さ月まつまのこそそのふる声
- 一一七 子規一こそ聞は夢のよの名残の空にありあけの月
- 一一八 名のる也雲るはるかにはとゝきすあざくら山のたそれの空
- 一一九 郭公またよひながらあくる夜の雲のいつくに鳴わたるらん
- 一二〇 やとりせし花たちはなはそれながらまれに成ゆく時鳥哉
- 五月雨
- 一二一 音羽川せき入水にみゆる哉浪さへくるさみたれの空
- 一三一 この比のみつのわたりは軒にふくあやめにちかき五月雨のな  
み」<sup>8ウ</sup>
- 一三三 あま人は袖ともわかすしほるらんをしまか磯に五月雨の比
- 一三四 五月雨はこやのしのやにあらす共これもほしあへすさゝかに  
の糸
- 一三五 水まさる八十字治河の五月雨に木すゑをかよふまきの島人
- 草花
- 一三六 うちなひきさやかにみえぬ秋なれと荻ふく風そかたへすゝし  
き
- 一三七 かせになひくかたをか山の女郎花たれよもぎふに思ひたつら  
ん
- 一三八 秋かせの吹にし日よりしのすゝき忍ひもあへすほにいてにけ  
り
- 一三九 あきはまた鹿のねさそふしるへせよこ萩か原をわたる夕かせ
- 一四〇 大かたは玉にまかひし白露もはきにしたかふ秋の夕暮」<sup>9オ</sup>
- 月
- 一四一 いかにいひいかにかすべき山のはにいさよふ月の夕くれの空
- 一四二 なかむれは木の間もりくる秋の月。かせにさかなき森の下影
- 一四三 有明の月には遠き名のみしてすむかひなしやにしの山本
- 一四四 いまは秋山ある里にすまひせし月みる空に有明もなし
- 一四五 はゝそはら木末をもゝに染かへて残るくまなき森の月かけ
- 紅葉
- 一五六 大井川あらしの山のかけみえてそここの木すゑにもみぢしてけ  
り

一三八 秋の時雨ときはの山をそめかねて嵐にそかるよその紅葉を

一三九 あきふかし染ぬ梢はあらし山しぐれにもるゝあをぎ一えた」

一四〇 龍田山そむる時雨のあやめまで秋ももみちもふかき比哉

9ウ

## 雪

一四一 をかや原うらかれにけり冬のゆきあるからをのゝ明ほのゝ空

一四二 此比は花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪

一四三 冬の夜のしのゝめの空は明やらてをのれそ白き山のはの雪

一四四 あやにくに時雨にたへし松の葉の心よはきは雪の下おれ

一四五 さひしさに煙たえせぬしつの庵をとへかし人の雪の夕くれ

## 水

一四六 冬くればいしまのたづき<sup>きつ</sup>氷しておもひたえたる山川の水

10オ

一四七 霜さゆる玉もの床にこぼりしてはらひもあへぬをしの声哉

泡きよき  
法花

暁

一四五 あけかたは遠のみきはに氷してかへりてちかき志質の浦浪  
一四九 うき草はなを跡とめす冬のよの谷行水はうすこぼれとも  
一五〇 冬の夜の河かせざむみ氷しておもひかねたる友ちとり哉

## 神祇

一五一 いすゝ河たのむ心しむかけはあまてる神そ空にしるらん  
一五二 ちはやふる神や知らんもろかつら一かたならすかくるたのみ

を

一五三 玉かきや神のひかりもまさり行月やかつらの昔おもえて

一五四 跡たれし過にしかたを思ふにも頼しるしをみわの山もと

一五五 千早振庭火のまへにとる榦香をかくはしめ山あるのそで

一五六 いつる朝日山の高根をてしせともゆくゑもしらぬ谷の埋木

本ノ  
無漏

## 阿含

一五七 しりそめしかけきかそのゝはきのはにひまなくをける此汎の

## 朝露

方等

一五八 さま／＼にをしへし道のかひあれはつまにはふかしさとりい

てにき

般若

一五九 泡きよき水にうつれる月かけや昔といへるためしなるらん

は

11オ

一六〇 いたづらにもるゝ草木もなかりけりいちみの雨の所わかね

暮

一六一 はつせ山あけぬとつくるかねの音に声うちそる嶺の松かせ

一六二 秋の月ひかりそまさる玉くしけふたみのうらの明かたの空

一六三 くもりこしひはらの下の月影も残るくまなし有明の空

一六四 秋は夜の月のかけさすまきの戸ををしあけかたの横雲の空

一六五 雲もなしなかめはにしにめくりきて山のはちかき有明の月

暮

一六六 三日月のはめくくれの山のはゝななかめはかりも有明の空

一六七 大井河ゐせきに秋の色みえていさよふ浪のゆふくれの声

一六八 山おろしに梢の木のはつきはてゝ色なき枝の夕時雨哉」11ウ

。

一六九 ある雪をたそかれ時の空めには花とや人のみよし野の里

一七〇 山のはをめくる時雨の雲間より取あへ出るゆふ月夜哉

山路

一七一 春ゆけは霞のうへにかすみして月にはつらしをのゝ山みち

一七二 葉をしけみもる隙もなし秋のよの月おほろ成足柄の山

一七三 秋の月くまなき比はとまりせしひるにやかはるさやの中山

一七四 ながめこし心は秋の闇なれや月影きよきふわの中山

一七五 立田山もみくちし秋はうつもれて木の葉にまよふ岩のかけ道

海辺

一七六 なかむれはあはちのせとの夕霧にむらきえわたるあまの釣

舟<sup>12オ</sup>

一七七 月きよきあかしのせとの浪のうへにうらみを残す有明の空

一七八 あまをふねゆくゑもしらぬ浪の上にいつくの浦へさしてゆく

らん

一七九 磐の松あらしにたえぬおりしもあれ哀うちそふ浪のをと哉

一八〇 あかしかたうらふくかせに雲消て浪よりにしにあり明の空

禁中

一八一 はるはたゝ軒はの花をながめつゝいつらわするゝ雲のうへ哉

一八二 うすみとりまた夏あさき木間より春をとゝむる藤つほの藤

一八三 九重にはきのさかりはみかは水岩間の浪も花さきにけり

一八四 夜もすから雲井の庭をてらすなるゑしのたく火は有明のころ

一八五 くまもなき雲井の月にやすらへはうしみつまでに夜も成にけ

り」<sup>12ワ</sup>

遊宴

。

一八六 千世の春たにの戸いつる鶯のはづねにそ引二葉なるまつ

一八七 結ひあくる宿の泉の水さて夏も夏なき物にそ有ける

一八八 秋の夜の月にてうたぶ舟のうち浪のうへなるうからめのこゑ

一八九 雪ふかきあはづの原のくれかたはあはするたかも手に帰る也

一九〇 敷島ややまとことの葉かちまけに人の心そにたえぬる

公事

一九一 雲のうへにこれや春たづ験しなる袖をつらぬるけふの諸人

一九二 逢坂の山たち出て雲のうへに影さしのほる望月の駒

一九三 あまつ風雲の空をふくからに乙女の袖にやとる月影

一九四 もろ人のみたらし川にするか舞雲ゐにかへるあか月の声

一九五 年のぐれ三世の仏の御名を聞いて心はれ行雲のかよひら

祝言

一九六 三笠山いつる朝日のひかりよりのととなるへき万代のはる

一九七 春くれはひとしまさる住よしの松やちとせのためし成らん

一九八 千早振袖そ知らんふしておもふおきてかそふる万代のおく

一九九 亀のおいはねをおつる白玉の数かぎりなき千世の行末

二〇〇 むしるたやかねてちとせのしるき哉いつぬき川に露遊ふ也

(一行分空白)

建仁元年三月内宮御百首」<sup>13ウ</sup>

春

二十首

一〇一 朝日さすみもそ河の春の空のとかなるへき世のけしき哉

一〇二 見わたせは今朝はかすみの志賀のうら舟そむる春の初かせ

一〇三 立田川柳か枝の春かせに水きえてはさゝ浪そたつ

一〇四 御芳野のこそ山かせ猪さえて霞はかりの春の明ほの

一〇五 鶯のはねしるたへのあは雪をきえねと春のかせはあきつゝ

一一六 淡雪のいまたぶるのゝ下わらひをのれも出て春はしるらん

一一七 難波津にさくやこの花朝霞春たつ波にかほる春かせ

一一八 やまかつのかきほの草のうすみとりやがてもなるゝ春の露かな

一一九 朝霞もろこしがけてたちぬらしまづらかおきの春の明ほの」

14才

一一〇 かへるかり都の雲をはるかけてなれこし空のかたみともみよ

一一一 梅かゝをまやのあまりにさそひきてありとや袖に春かせそふ

一一二 桜はなそれともえこそしら雲のなへてかゝれるやまの夕暮

一一三 帰るかりたひの空にもわするなるよし野の花にかすむよの月

一一四 いかにせん花に山風吹ぬ也物おもへとのみよし野の春

一一五 花の色は昔ながらに匂へどもたれかはほとんしかの春かせ

一一六 まよふとも今はいとはし春の風花より後のみねの白雲

一一七 待わひぬまれにもとひこ都人やよひの月のあり明の比

一一八 いかにせんよにあるなかめ紫の戸にうつろふはなの春の暮か

一二九 春の名残よし野ゝおくにたつぬれは花の青葉に山かせそふ  
く」<sup>14ウ</sup>

夏 十五首

一三〇 あつまちのさのゝぶな橋あすよりやくれぬる春を恋わたるへ

一三一 時鳥さて山鳥のしたりおのなかくつらきさ夜の一ごゑ

一三三 子規まよひながら明にけりさもあらぬ鳥の音のみきこえて

一一四 泪にはこれをからなん時鳥はなたちはなのむら雨の露

一一五 むすぶての露に月すすむ山の井のあかてもあくる夏の空哉

一一六 里人のおりはへほせる夏衣なぬかもすきぬさみたれの比

一一七 まはらなるあまのとまやの五月雨にかつかぬ袖をほしきわつ

らふ

一二八 郭公月見よとてのしるへ哉なきつるかたのありあけの空」

15才

一二九 しほたれぬにほの水海あまの袖ほしえぬものを五月雨の比

一二一〇 すきぬなる夜半のね覚の郭公声をはしはし月にのこして

一二一 日にみかく玉かとそみる夕たちはれ行跡の野への白露

一二二 みたれあしの下葉すゝく露はゐて沢辺の水にかよふ秋かせ

一二三 なかむれは秋ちかしとの験しかな鳥羽たの露にほたるとふ也

一二四 故郷の庭のさゆりの花にをく露に秋なるかせわたる也

一二五 夏と秋とゆきかふ空やふけぬらんやゝ露おもる夜はの袖哉

秋廿首

一二六 袖のうへに秋しれとてのひかりかな木のまの月のぬるゝかほ

なる

一二七 いかにしていくかもあらぬ秋かせの身にしむ色をふかくそむ  
らん」<sup>15ウ</sup>

一二八 山ひめの衣秋かせふくからに色ことゝにのへとなりゆく

一二九 露しけぎ鳥羽田の面の秋かせに玉ゆらやとるよひの稻妻

一四〇 とこ世より山とひこえてくる雁の翅にのこる故郷の雲

一四一 秋をへて物おもふ事はなけれども月にいくたひ袖ぬらすらん

一四二 夜もすからあきの有明を水無瀬川結はぬ袖に宿る月哉

一四三 さをしかの入野の野へのはつ尾花たれ手枕にむすひそめけん

二四四 思ふ事わが身にありや空の月かたしく袖にをける白露

二四五 いかならんときかわすれん宮木のゝ萩の上葉の露。月影

二四五 一夜ぬる野へのしのやのさゝまくらかことかましき袖の露哉

二四七 たかむかしすみこし里の秋風や猶ふか草の野へに吹らん」

本ノマ、  
16才

二四八 をしか鳴秋の山田のかりよりにいなばの風

二四九 来てみれはあかしの浦の夜半の秋おもひよりも澄る月哉

二五〇 うきねするねさめの秋をなむれは昔の月に松かせそ吹

二五一 秋の雲千さとをかけて消ぬらん行事をそき夜はの月哉

二五二 白露のをくてのいなはかりそめにやるとともなき夕月よ哉

二五三 春の夜のおほろ月夜の面影をしはしみせける夕霧のやと

二五四 あきふかしたれあさちふにひとりかも夜さむの衣月にうつら

二五六 もみち葉をぬさにたむけんゆく秋の空の名残ををしかなく也

二五六 我袖にいくたび月のやどるらんくもれははるゝ初時雨かな」

二五六 やとりこし露の行ゑをとひかねて霜になれぬるむさしのゝ月

二五八 冬のきていくかもあらぬをなかむれは空さえわたる霜のうへ

の月

二五九 ねさめとふかけひの水も峯の松も雪に音せぬみねの松かせ

二六〇 かりにこしうづらの床もあれはてゝ冬ふか草の野へそさひし

二六一 立田山木のは吹はらふ木からしにひとりつれなき峯の松哉

二六二 すかはらやふしみの空にかせえて雪けになりぬをはつせの

人

冬十五番

二五六 我袖にいくたび月のやどるらんくもれははるゝ初時雨かな」

二五六 やとりこし露の行ゑをとひかねて霜になれぬるむさしのゝ月

二五六 冬のきていくかもあらぬをなかむれは空さえわたる霜のうへ

の月

二五六 ねさめとふかけひの水も峯の松も雪に音せぬみねの松かせ

二五六 かりにこしうづらの床もあれはてゝ冬ふか草の野へそさひし

き

二六一 立田山木のは吹はらふ木からしにひとりつれなき峯の松哉

二六二 すかはらやふしみの空にかせえて雪けになりぬをはつせの

神祇

二六〇 かりにこしうづらの床もあれはてゝ冬ふか草の野へそさひし

き

二六一 立田山木のは吹はらふ木からしにひとりつれなき峯の松哉

二六二 すかはらやふしみの空にかせえて雪けになりぬをはつせの

## 山

二六三 さひしある世のうきよりはいかゝせんみやまのおくのしは

二六四 霜むすぶ庭のかるかやはの／＼とまかきのくれにのこる秋

二六五 山かせのふしみのすそにたちす雪それそまことに空にしられ

二六六 しほかせの吹あけの浦のとも千鳥いく夜さえたる月をみるら

二六七 月ならぬ雪も有明の冬のそらくもらはくもれさらしなの里

二六八 舟かよふやそうち川のかはる瀬にたれかこしまの雪の夕くれ

二六九 けぬるうへにふりしきみ雪あすよりの春かせふかはまれにこ

二七〇 おしみこし花やもみちの名残さへさらにおほゆる年の暮哉

二七一 くもちかく飛かふたつこのゑまであのとけき空の験しとそ思

ふ

二七二 万代は浪こそかけてかそふらめはまへの松のゆくすえの陰

二七三 かせ吹はおはなたよるくれ竹のしけきよことに千世そこも

れる

二七四 我宿に千とせをかけてすむ月の光をちぎれ庭の松陰

二七五 四方のうみの浪につりするあま人もおさまれる代の風はうれ

しや」

本ノマ、  
17才

二七六 つきもせず都の空に吹かよへ神路の山の千世のはつかせ

二七七 神風やいせの浜辺のあけほのに霞ふきよる浦の初風

二七八 神かせや空なる雲をはらふらん一夜も月のくるよそなき

二七九 秋の空のとけき浪に月牙て神かせさむしいせの浜萩

二八〇 みもすそやたのみをかくる神風の心にふかぬ時のまそなき

雜二十首

けり

三〇〇 おもふへしくたりはてたる世なれとも神のちかひそ猶もくち  
せぬ

二八一 引てうへし人の行ゑはしらね共木たかきまつのかせの音かな

二八二 秋草のかりねのまくらくよへぬ下はの露に袖ぬらすとて

春二十首

三〇一 宮河のはるたつ空のはつかせにうち出る浪の花やちるらん

二八三 草枕都の秋をさそひきて月におほゆるふるきとの空」<sup>18オ</sup>

三〇二 たにかせのうくひすきそふたよりをや山里人も春を知らん

二八四 こよひたれ松と波とに夢さめて吹上の月に袖ぬらすらん

三〇三 はるの来てなをふる雪はきえもあへす杉のは白き三わの曙

二八五 忘るなよ露にしほるゝたひ衣きつゝもなれぬあつまちの月

三〇四 み山にはまた雪ふかき松のかせずそ野に春の氷とく也

二八六 清見かた晨明の月の影さてせきちの鳥もこゑさかる也

三〇五 かすめともよしのゝ雪の猶さて松の葉しき古郷の春

二八七 旅の空おなし雲路を通ひきて月をともなふ故郷のかせ

三〇六 からさきや春のさゝ浪なをさてかすみに成ぬにほの水うみ

二八八 哀なるあまの磯屋もいかゝせんさて世にある方しなければ

三〇七 あさかすみ春のしきつのうらかせにみとりにかよふおきの浪

二八九 すまのうらぶるきせきやを月をもるかよふ衛はきく人もなし

三〇八 にほの海やかすみの空にこく舟の浪にきえゆくしかの曙

二九〇 故郷をたゞ松かせそひとりふく月はみるやととふ人はなし

三〇九 物思はよたへてもいかゝなかもましふけ行月の春のけしきを

二九一 やまふかみ柴のかりいほね覚をも月はさすかにとはすやはあ

三一〇 春霞立出てみよ芳野山今いくかありてさくら咲けん」<sup>19ウ</sup>

二九二 住の江の松のしつえに浪かけて梢に残るおきつしほ風

三一一 かすか山木末はかすむ峯のまつもとの岩ねに春雨ぞ降

二九三 みなれさほさしてそれとはなけれども過にしほかり恋しきは

三一二 時しあればかへるならひのはるのかり涙そ花の枝に

二九四 月のすむをしまの松の風の音はなれたるあまも如何にしのふ

三一三 桜花いまか咲らん足曳の山下風のにほふあけほの

二九五 人しけき都の空におもふかないにみ山の月はさひしき

三一四 かすみたちこのめはるさめ古里の芳野の花もいま咲らん

二九六 事そともなきたにぬるゝたもとより恋や恨のながめをそ思

三一五 かきりなきあはれは春とみゆる哉よもの山辺の夕暮の空

二九七 我のみとむすぶ深山の柴の庵に月はもとよりすみなれにけり

三一六 かすみしくとこよの島を詠ればくれゆく山にきゆるかりかね

二九八 大空をその事となく詠ればあきなる風そらにふきける

三一七 かへる雁の夜はの涙のをきつらん桜露けき春の明ほの

二九九 松にふくみやまのかせのはけしさもおほえぬまでに住なれに

三一八 野も山もおさまれる世の春風は花ちらるころもいとひやはする

三一九 御芳野の春はやよひに暮にけり桜になりぬ四方の山かせ

三一〇 さほ姫もくれゆく春をおしむらんわきてかするる恋の空哉」  
〔よひ歎〕

### 夏十五首

三一一 きてみればなにはの夏の朝はらけ春こしかたへかへるうらか  
せ

三一三 なれ／＼し春の祝<sup>(ママ)</sup>の花の香もとをさかりゆくなつの比哉

三一四 みしま江のひしのうき葉にある玉をみかくか夏の月もさやけ  
き

三一五 をのつからならのかけもる夏の月いかて下葉の露にすむらん  
ぬれつゝや独ゆくらん郭公とはたのをのゝ雨のゆふくれ

三一六 なつの夜のふかき梢のかせふけは曇ぬ月にむら雨をある

三一七 故郷の立花そく庭の雨の鳴郭公むかしこふらし

三一八 夏の空きよ滝河のいかたしやいく夜も月にすゝみきぬらん  
三一九 郭公なきつるかたの山のはになこりかほなる夜はの松かせ」

20ウ

三二〇 ほとゝきす月に契や有明の山よりいつる声のさやけき

三二一 時鳥こゑやむかしの磯のかみあるき都のむらさめのそら  
三二二 蓮葉にはにこらぬ露の玉こえてすゝしくなりぬみな月のかけ

三二三 さゝかにの糸に玉ぬく夕暮はしかこそなかね秋そ来にける  
三二四 蟹とふもりの下草秋かけてまたき色づくみな月の空

三二五 六月やたけうちそよくうたゞねのさむる枕にあきかせそ吹  
秋 二十首

三二六 袖の上に露たゞならぬゆふへ哉おもひし事よ秋の初かせ

三三七 あはれをは荻の上葉になしはてゝしらすかほなる秋の初風  
三三八 ときは山やまたちならすしかの音をとふらふみの松の風  
〔哉〕 21オ

### 三三九 さをしかのいる野のすゝき方よりにかせにみたるゝ虫のこゑ

三四〇 袖の露をいかにかこたん事とへとこたへぬ空のあきの夕暮  
〔統古〕

三四一 我袖にあきなればとてをく露をこと有かほに宿る月哉

三四二 山里は月みよとてやをのつから空行雲をはらふ秋かせ

三四三 しのにをく露にふか草のあき風に鶴なくなる野への夕暮

三四四 今はたゞおもひもいれて月はみん我やとからあきのかせか  
は

三四五 しかのねも聞ぬね覚のかせたにも深山の月はさそなさひしき

三四六 かり人も哀しさかし秋かせに妻こふ鹿のゆふくれのこゑ

三四七 秋ふかきみかきか原の夕霧につまとふしかの夕くれのこゑ

三四八 あきの田のかり。庵に露をきて隙もあらはに月そもりくる」

21ウ

三四九 草枕夜半の哀はおほえ山いくのゝ月にさをしかの声

三五〇 すみわひぬ事とひこなん都人は山の庵の秋のくれかた

三五一 たかまとの尾上のみやはあれぬともしらてやひとり松虫の声

三五二 すかはらや伏見のあきのくれかたにあれまくおしむきり／＼  
すかな

三五三 長月の有明かたの月影に秋をやかこつさをしかの声

三五四 野への色はおもひしよりはうらかれて霜をうらむる葦かな

三五五 秋ふかき有明かたのよものあらしみ山の月と木のはふく也

冬 十五首

- 三五六 さをしかのをのゝ草ふしあれぬらん秋はいくたのふゆの曙
- 三五七 冬のきて紅葉ふきおろす三室山風の末にあきそ残れる」<sup>22オ</sup>
- 三五八 霜ふかき夜半のあらしやこはるらんむすほゝれゆく峯の松風
- 三五九 みよしのゝしくれも日敷故郷にかよふあらしや雪けなるらん
- 三六〇 冬さむみ岩まの浪は氷して清瀧川に月そのこれる
- 三六一 足曳の山にしろきはかきくもり昨日の空に降し雪かも
- 三六二 天川河瀬にやとをかり衣かたのゝ冬の雪のゆふくれ
- 三六三 故郷は軒のいたまに月もりて嵐にのくる冬の夜の夢
- 三六四 雪しろくかひのしらねのさゝのいほやとれる袖に宿る月影
- 三六五 冬さむみあさあけの袖の氷る哉軒はの松の雪の下風
- 三六六 とりかへる谷のとほに雪ふかしつまきこるおのみちやたえ  
なん
- 三六七 有明の月さへあまりさゆる哉庭の浅茅の雪の下風」<sup>22ツ</sup>
- 三六八 ひしの山たかねの雪のけぬかうへに又あるものはあられ也け  
り
- 三六九 絶／＼に残れる峰の椎柴にふけゆく冬の日数をそみる
- 三七〇 松かせに又こんころをたのめてやふゆもいなはの山のしら雪
- 祝五首
- 三七一 関守も閑の戸うとくなりにけり治れる世に逢坂の山
- 三七二 和歌のうらのあらはに塩や満ならん千代をこめたるたつのも  
ろ声
- 三七三 かせふけはなひきおれすなよ竹の末はの露もいく千代の数
- 三七四 波かくるいその岩ねの松か枝のかはらぬ色にうら風そふく
- 三七五 しほの山さし出の磯のしきなみに千とせをいのるとも衝哉
- 三七八 春の色をけふ宮川の杉の葉に吹くるかせも神さひにけり
- 三七八 宮河やいつもみとりの帽の葉に今一人のはるかせそふく
- 三七八 久方の空ゆくかせに雲きえて月影さむし宮河の秋
- 三七八 すゝか山いせのうらはの秋の浪やとれる月をよする春風
- 三八〇 よゝへてもかみやみ川にたえぬ浪たえてわするゝまなく時な  
し
- 雜二十首
- 三八一 昔には神もはとけもかはらぬをくたれる世とはひとの心そ
- 三八二 都人たのめぬやとの櫛の戸になにのならひの庭の松かせ
- 三八三 なかめつる明石の月のなこり哉島かくれ行冬の明ほの
- 三八四 月をのみみ山のおくにむすふいはもとよりたてる庭のまつ  
哉」<sup>23ウ</sup>
- 三八五 草枕床にね覚をすかのねのなか／＼しよを月そとひける
- 三八六 なかめわひぬかくてふるひを又もありやみるらんものを空に  
すむ月
- 三八七 はつせ山あがつき方のかねの音にうちおとろきて月をみる哉
- 三八八 山さとのね覚もよほす松かせもすみなれぬまぞ夢そのこりし
- 三八九 たれみよと人も昔せぬ奥山のまきのはわけに独りすむ月
- 三九〇 おなし露の袖や草はにをきわけてほすましもなき旅衣哉
- 三九一 しほたるゝすまのうらはゝよる浪のいく夜の月をやとしきぬ  
らん
- 三九二 つたしけるうつの山辺の山かせにたひねの夢を結ひ住つゝ
- 三九三 よそにみしたかねの雲にこよひかも衣かたしきあかしつる哉
- 三九四 今宵たれあかしのせとにうきねして浦はの月にそてぬらすら

三九五 何となくすきこしかたのなかもて心にうかふゆふくれの空  
三九六 唐衣袖しくらのとまやかたならはぬいその松のかせかな  
三九七 故郷にまでとつけこせうつの山みやこへかよふ晨明のつき  
三九八 草枕たひねの夢の閑守は野にも山にも松にふくかせ  
三九九 かりにてもおもひをこせよ宮こんおなし心に月はみすとも  
四〇〇 わかのうらのあしまの浪にたちかへり昔によたるたつの声哉

(一行分空白)

同六月千五百番御歌合

春二十首

四〇一 春たてはかはらぬ空そかはり行昨日の雲のけふのかすみか」  
四〇二 冬と春とゆきあふ坂の松かえに露をしのき淡雪の降  
四〇三 葛城や高まの山に雪消てさえし嵐は春の初風  
四〇四 白妙の衣春雨かきくもりふる野の若葉今やつむらん  
四〇五 たぎりけん軒はの梅をたつぬれははなもえならぬ袖の香そす  
る

四〇六 春風のさそふる野への梅かえになきてうつろふ鶯のこゑ  
四〇七 池水のみくさにをけるよるの霜きえあへぬうへに春雨そ降  
四〇八 ふかき夜の哀はしるや春の月しく物もなき有明の空  
四〇九 宵のまほほのめく月のしかすかに露も果ぬ春の大空  
四一〇 月よし夜よしと誰につけやらん花あたらしき春の故郷  
四一一 みよしのゝ吉野の山のはなさかり雲より下にはるの白雲」<sup>25</sup>オ  
四一二 雁かへる峯のかすみのはれすのみ恨つきせぬ春の夜の月  
四一三 かへるかりかすみのうちに声はして物うらめしの春のけしき  
や

四一四 よし野山雲にうつろふ花の色をみとりの空に春風を吹  
四一五 ちらはぢれよしや芳野の山桜吹まよふかせはいふかひもなし  
四一六 花は雪とあるの小山田返しても恨果ぬるはるの夕かせ  
四一七 かすみゆく三月の空の山のはをほの／＼をくるいさよひの月  
四一八 よの中に絶てあらしのなかりせは花に心はのとけからまし  
四一九 かせふけは花の白雲や消て夜な／＼はるゝみよしのゝ月  
四二〇 いにしへの春さへけふはつらき哉ふるといかゝ帰りそめけ

人

夏十五首」<sup>25</sup>ウ (実数八十四首)

四二一 はる山の霞の衣ぬきすてゝけさはみとりのなつの明ほの  
四二二 夏の空曇れる夜はの卯花の月をやとせる玉川の里  
四二三 郭公なかすはたゞにふけなんらん夢のたゞちもまち心みん

四二四 またよひの月まつとて明にけりみしかき夢の結ふともなく  
四二五 夕月夜しほしやとれる山の井のあかぬ光の袖にすゝしき  
四二六 心あてにきかはやきかん郭公雲路にまかふ峯の一聲  
四二七 おもひ入てなかむる空のむら雨にあまり程なき時鳥哉

四二八 徒士のやみをもわかぬみなれ棹流石に夏は月をまつ也  
四二九 ともしするかけをよな／＼深山木のこりすもしかのめをあは  
すらし

四三〇 かせをいたみはすのうは葉にやとしめてすゝしき玉にかはつ  
なく也」<sup>26</sup>オ

四三一 沢水の草葉にやとをかりこものおもひみたれて行蟹哉  
四三二 柳かけすゝみにきたるから衣ならす袂になるゝ川かせ  
四三三 夏深み草の葉かくれ露はるてしのひ／＼の秋のはつかせ  
三四四 みそき河瀬々の玉ものみかくれてしられぬ秋や今夜きぬらん

秋 二十首

冬十五首

- 四三五 かせの音に秋はけふより立田山よはにや夏の独こゆらん  
四三六 秋たちて昨日にかはる波かせにすゝしなひくいせのはま荻  
四三七 しのすゝきまたほに出ぬ夕つくよ流石に秋のけしき成共  
四三八 七夕のくものたもとやぬれぬらんあけぬとつくる秋かせの声  
四三九 日かけさすをかへの松の秋かせに夕くれかけて鹿そ鳴なる」  
四四〇 このゆふへかせ吹たちぬ白露のあらそふ萩をあすやかもみん  
四四一 女郎花枝もとをくにをく露をまちとる風にむし恨なり  
四四二 わけゆくばしけくも露のみゆる哉月吹やとす野への秋風  
四四三 あはれ昔いかなる野辺の草はよりかゝる秋風の吹はしめけん  
四四四 野へにをける露をは露となかめきぬはなる玉かかりの涙か  
四五五 ものやおもふ雲のはたての夕暮にあまつ空なる初雁の声  
四四六 秋の田のしのにをしなみ吹かせに月もてみかくつゆの白玉  
四四七 小山田のいなはかたより月さえてほむけのかせに露みたる也  
四四八 めぐりゆく秋やはもとのあきの空月そむかしのしかのふる里  
四四九 おなしくは哀しられん人もかなしかとむしとの秋の夕くれ」  
四五〇 秋の虫の手たまもゆらにをるはたを誰きてみよとのへの夕く  
れ  
四五一 ますかくみみるめのうらのよはの月こほりをよするの秋の夜  
せ  
かれ  
四五二 玉ほこの道のしは草うちなひき古きみやこに秋かせそ吹  
四五三 秋山の松をはしのけ立田姫そむるにかひもなきみどり也  
四五四 けふこそは秋の日数もくれば鳥あやなし名のみなか月の空  
秋の夜  
四五五 から錦秋のかたみをたゞしとや霜まで残る庭のひとむら  
四五六 から錦秋のかたみをたゞしとや霜まで残る庭のひとむら  
むしろ  
四六〇 から錦秋のかたみをたゞしとや霜まで残る庭のひとむら  
四六一 み山ふく四方の木からしさえそめて楓のは白く初雪そふる  
四六二 里人の庵にたけるしるしはの煙吹しく山おろしのかせ  
四六三 をしてるや難波のあしの下かくれりねもる鷗の霜になく声  
四六四 浦ちかき末の松山雪れは冬よりうへを浪やこゆらん  
四六五 雪のあした木の下風は寒けれと桜もしらぬはなそちりける  
四六六 月かとてはらはねは又白妙の袖にそざゆるふかき夜の霜  
四六七 まきつもくの岸の小松に雪ふれはひはらか末に雲そかゝれる  
四六八 杉の葉のみとりもみえすふる雪をわたるあらしの跡の一し  
ほ」  
四六九 冬くれてことしもけふにつけはねの木のめもかねて春めきに  
けり  
祝五首  
四七〇 万代と御裳瀧川の春のあした浪にかさねてたつかすみ哉  
四七一 万代とみたらし河の夏のよに秋ともする山のはの月  
四七二 よろつよとみかさの山の秋風にのとかにみねの月そすみける  
四七三 万代とみつの浜かせうらさえてのとけき浪に氷るにけり

四七四 よろつよとみくまのゝ浦のはまゆふのかさねてもなをつきせ  
さるへし

恋十五首

四七五 足曳の山した水のわきかへり色にはいてし木かくれてのみ

四七六 神無月袖のみしたの初しきれ人の心のあきの一しほ」<sup>28</sup>ウ

四七七 あしのやのなたの塙屋の海士人もしはるゝ袖のいとまなきま  
て

四七八 いつらあきのなかきてふ夜は名のみしてつきぬ名残そ有明の  
月

四七九 つれもなき人をはたのむかひなくてくるよことに秋かせそ  
吹

四八〇 なかむれはこぬ人またるわひつゝも今宵の月にあかすかもね

四八一 君はしるやまつ夜あまたに積りきて袖の有明の月を見る哉  
ん

四八二 うらみぬとなれる夕へのけしき哉たのめぬ宿の荻の上風

四八三 荻の葉に身にしむ風はをとつれてこぬ人つらき夕くれの雨

四八四 うつゝこそなる夜ぬ／＼のかたからめそをたにゆるせ夢のせ  
き守

四八五 はまひさし久しくもみぬ君なれや逢後をなみの浪まなければ  
四八六 かす／＼におもふ心はおほよとの松をうらむる浪のをと哉」<sup>29</sup>オ

四八七 つれなさはたよことうちらにたて煙わかすむかたは月そさやけ  
き

四八八 白露もあけ行ほとは野へにをく時ともわかぬ袖の上哉

四八九 長月の月みてかひはなけれどもたのめしものは有明のころ

四九〇 夕たすき万代かけて住吉の神や種まきし岸の姫松

雜十首

四九一 都にもみしは月そとおもへともそゝろにぬるゝたひの袖哉

四九二 ありそ海のやむ時もなき浦風に浪かくれゆくあまのつり舟

四九三 すまのうらにまつ夜ふけゆく月影を浪のあなたに誰らん  
本ノマ、

四九四 宮古人とはて月日はすきの庵の軒になれたるみねの松かせ

四九五 これやさは都にてみし空の雲それをかたしく嶺のたひふし」

四九六 旅ねする夜はのあらしに夢さめて打詠れはありあけの月

四九七 わするなよかゝるねさめの夜半の秋いかなる空の月をみると  
も

四九八 月残るあしやの里の有明に昔ににたるあまのいさり火

四九九 誰みよとあれたる宿の松かせにひとり住けるあさちふの月

五〇〇 朝夕にあふく心を猶てらせ浪もしつかに宮川のつき

(一) 行分空白)

建保四年一月御百首

五〇一 昨日までさえし雪けの引かへてあくる霞の山そのとき

五〇二 うらいつる春やとませの波まより白ゆゝはなの色そぐたぐ  
る」<sup>30</sup>オ

五〇三 時しらぬ山はふしとし聞しかと春たつ空はまつそかする

五〇四 いもはけぶしめのゝあきぢふみ分てひれある袖そ若葉をそ摘

五〇五 春かせの鶯さそふたよりにや谷のこほりをまつはとくらん

五〇六 桜花えたにはちるとみるまでそかせにみたれて淡雪そふる

五〇七 鶯の飛火の野への雪のうちにそれかと計匂ふ梅か枝

- 五〇八 みよしのやむつたのよとの川柳みとりをくくる春の岩波
- 五〇九 みとりなる野への柳の露をもみたゝぬはかりに春かせそふく
- 五一〇 さゝ竹の大官人は跡ぶりて露そふかきさほの山かせ
- 五一一 難波女のたくやあし火のけありさへ臘月夜の色やそふらん
- 五一二 たかみそき夕されくれでかけろふのもゆる春辺のみしかよの  
月」<sup>30</sup> ツ
- 五一三 さ保姫の霞の衣ぬきをうすみ花の錦をたちや重ねん
- 五一四 かへる山おもひつるかのこしの海に裂りやふかき春のかりか  
ね
- 五一五 山さくらさきにけらしもみよしのゝ八重たつ雲に匂ふ春かせ
- 五一六 をはつせやみねはさくらにうつもれて入逢のかねに匂ふ山か  
せ
- 五一七 白鳥のさきさか山の岩つゝしいはねと春の色はみえけり
- 五一八 ゆく春の名こりやすらふ村雨におる手露けき山吹の花
- 五一九 春の行みよしの川の瀬をはやみせくもかひなき花の岩波
- 五二〇 おしみこしおなし名残のゆかりとて花の道より春や行らん  
夏
- 五二一 すきにけり春も程なくしゐておる昨日の藤の露もひぬまで」  
31  
秋
- 五二二 郭公はつ声さそふをとは川せき入る水の波のたよに
- 五二三 夏きてもまたゆみはりの月草のうつりやすくもくらす春哉
- 五二四 いく年の天津日影にさらすらんかつてつくりの布引の滝
- 五二五 せきかくるをたの苗代木すみて畔こす波にかはつなく也
- 五二六 深山出でいつれのさとを契るらん暁ふかきほとゝきすかな
- 五二七 五月に木ゆきまさる飛鳥川瀬瀬もみえぬ浪の通路
- 五二八 うは玉のやみにやはれんいたづらに月の比なる五月雨の空
- 五二九 続古 はしたてのくらはし川にかるすけのなかき日くらしすゝむ比  
哉
- 五三〇 天の川雲のみを行月なればなからてはやくあくる夏の夜
- 五三一 ほたる飛あしやの浦のしほひかたあまのたく火のかすやそふ  
らん」<sup>31</sup> ツ
- 五三二 みたれあしのしたはなみよりゆく水の音せぬ浪の色そすゝし  
風<sup>き</sup>
- 五三三 かた岡のあぶちなみより吹風にかつへそゝく夕たちの雨
- 五三四 日くらしのなく木かくれの山陰に夕露にはふ大和なでしこ
- 五三五 みそき河ゆきかふ空やふけぬらん露ながらおるあさの一ふさ  
秋
- 五三六 このねぬるあさけのかせのをとめ子か袖ふる山に秋やきぬら  
ん
- 五三七 秋はけふくるすのをのゝまはき原また朝露の色そにほはぬ
- 五三八 吹かへすまぐすか原の秋かせにうら葉の露も今朝よりそ吹
- 五三九 織女に今朝かすいとのうちはへてよるも程なくあくる秋かせ
- 五四〇 山のはにふくれははるゝうす雲を待出て出る秋のよの月」<sup>32</sup> オ
- 五四一 いなみのや草葉にする玉はこの道のなかてに秋かせそふく
- 五四二 庭ふかきおきの葉分にもる月の心つくしの秋も有けり
- 五四三 初雁のとはたのくれの秋かせにをのれとうすき山のはの雲
- 五四四 今朝みれば夜半の野分の浅茅生にあれて草はの露そみたるゝ
- 四五五 久かたの月かけきよしあまの原雲をわたる夜半の秋風
- 四五六 色かはる身を秋山となくしかの涙もふかきみねのゆふきり
- 四五七 露にふす野辺の千種の明はのにおきぬれて行さをしかの声

- 五四八 をく露のあたのおほのゝまくすはら恨かほなる松むしの声  
 五四九 秋風にのへのあしたは音もせて分ゆくあとを露はこはるゝ  
 五五〇 月そすむたれかは霜と夕嵐雲吹はらふかつらきの山」<sup>33ウ</sup>  
 五五一 いたづらに人こそとはねおく山の霧よりふかきみねの紅葉は  
 五五二 深草やあかつき寒く吹かせにいとゝ身にしむきり／＼す哉  
 新後撰 五五三 おしめとも秋は末のゝ霜の下にうらみかねたるぎり／＼す哉  
 五五四 なとなく庭のよもぎも下おれてさひ行秋の色そかなしき  
 五五五 秋はけふくれなゐくゝる竜田河神よもしらす過る月かは
- 冬
- 五五六 もみちはのこかれそわたる海士を舟初せの山はうちしぐれつ  
 五五九 三室山しぐれこきたれ吹風にぬれながらある峯のもみちは」<sup>33オ</sup>
- 五六〇 をしぬほすふしみのくるにたつ鴨の羽音さひしき朝霜の空  
 五六一 霜こほるのたのうはてにせく池のみきはになひくしのすゝき  
 截
- 五六二 雪ふれは岩ほにしろくさく花のおられぬ色をあらぶ浪哉  
 五六三 しほかれたひかたも遠しさ夜ふけてこぼらぬ沖の浪をあれ行  
 五六四 音に聞くめのさら山さら／＼だをのが名たてゝあるあられかな  
 五六五 けぶりたつおもひのしたやこほるわんふしのなる沢音むせふ  
 也
- 五六六 おもひかね猶いもかりとゆきもよにわか友千とり空になく也  
 五六七 あけはつるあさちの霜にかけみえてはのかに残る庭の月哉  
 五六八 山人のみちのしをりと成にけりかへるたかねの松のしらゆき  
 五六九 ときは木につもれる雪をありはてゝ杉のまとまるかせのはけ  
 しが」<sup>33ウ</sup>
- 五六〇 すかもかる八十字治川の瀬をはやみ手にもたまらずくるゝと  
 しなみ
- 恋
- 五六一 我恋はたかまと山の雲間よりも月のかけを待かな  
 五六二 袖にやはせくとせかれんはや瀬川ゆくての浪は色みえすとも  
 五六三 もよつてのやそのしまり心あらは恋にみるめの行ゑ知せよ  
 五六四 我こひはしづかさゝのやとまをあらみもりやしぬらん時雨ふ  
 る比
- 五六五 常磐木とたのめし人に秋立てことのはなから色かはる比  
 五六六 わすれめやちきる末野の桙弓とかりのゆつるたえははつとも  
 五六七 あたに行たなし小舟さしもやはうきたるなみの跡はたのま  
 し  
 五六八 おもひのみつもりのあまのうけのをのたえねはとてもよるか  
 たもなし」<sup>34オ</sup>
- 五六九 風吹はみ山にそよくさゝかきのいたづらおきのあかつきそう  
 五八〇 我恋はみなきる浪のあら磯に舟よりかねて心まとはす  
 五八一 うらみ侘わかひとりねのとことはにいはれしまての思ひ出も
- 五八二 月日のみすきのまさめのいたづらにあはすふきけん人や恨みん

五八三 から衣そてもひとつにくちにけりみしやその夜のまゝのつき  
橋

五八四 津のくにのなにはたゞまくをしか島したの思にこかれわひつゝ  
五八五 しかすかに人に心をおきつとりあふ事なみにうき名残すな

雑

五八六 久方のあまの露しもいくよへぬみあすそ川のちきのかたそき  
五八七 千年ふるまつのみしけくみゆる哉たのむくらまの山のかひに  
は」<sup>34</sup> ウ

五八八 はつせめの袖かとそもふ御芳野のたきのみなはの浪の夕暮

五八九 谷ふかく朝る雲やみちぬらん麓にみえぬときは木の峯

五九〇 みさこかるいはねの松のいかにしてあれたら波に年の経ぬら  
ん

五九一 朝日いてゝ空よりはるゝ川霧のたえまにみゆる遠の山本

五九二 あま乙女しほやきめかりしかのうらにつけのをくしもどるま  
なき比

五九三 山ふかみねさめの友としつたまきかすにもあらぬすまひなれ  
共

五九四 ふりぬれはいはやもまつも哀也むかしの人を見る心ちして

五九五 あけゆけは木かけはくらきみ山路に嶺とひこゆる鳥の一こゑ

五九六 哀なるあかつきちかくいつる月のくもらぬ空も麗なるかけ

五九七 心すむ色をやこゑにたくふらん入相の鐘にすくるうき雲<sup>35</sup> オ

五九八 宮こには山の端とてや詠らんわかすむ峯をいつる月影

五九九 難波えやあしのはしろくあくる空に浪うつ鳥の遠さかり行

六〇〇 み渡せはむらの朝けそ靈行民のかまとも春にあふ比

国語国文学会 会員近著紹介

稻田利徳・佐藤恒雄・三村晃功編 『中世文学の世界』

本書は、和歌文学・軍記物語・説話文学・隨筆文学・五山文学について、六章にわたって八人の方々の論考を収めたものである。

そのうち三村晃功氏は、第一章和歌文学の諸相で「私撰集—私家集名を冠する撰集—」を執筆され、私歌集名を冠する中世の私撰集が既存の歌集からの抄出で撰集された二次的撰集であること、類題歌集的側面を有すること、などを指摘されている。(世界思想社 昭和59年5月20日 一九〇〇円 二六六ページ)

大槻修著 『王朝の姫君』

第一章平安の都の風土と文化に始まって、第十五章はかなげな女の悲恋の物語まで、氏は数多くの実在・非実在の女性達を取り上げられる。義兄への不倫の恋に苦しむ寝覚の上、実子いじめされる『こわだの時雨』の中の君、男性遍歴を重ねる『有明の別れ』の中の中務卿宮北の方や和泉式部、更に夕顔や浮舟のはかなげな女の系列等が考察される。(世界思想社 昭和59年10月30日 一九〇〇円 二四二ページ)